

頓に加はり三月十九日に至るや左胸部に乾性肋膜炎を併発し体温四十度に昇り同二十七日以後は体温少しく降り三十八度を上下し居るも食欲益々減退し脈膊時時不整となり昏睡状態に陥り四月五日には肺炎状渙散し助膜炎症も殆んど消失せしか全身の衰弱益々加はり平井、中島及び確居国手等の努力も効なく去月八日午後二時三十分終に長逝せらる享年六十八、博士は旧岩国藩士江木俊敬氏の第二男にして安政五年九月十九日を以て生る初め法学を東京大学に修め明治十七年其業を卒ふるや直に擢られて大学講師と為り次て警視庁御用掛兼司法省参事官兼検事、農商務大臣秘書官兼参事官、外務大臣秘書官兼参事官、内務大臣秘書官兼参事官等に歴任し至たる所令聞あり明治十八年同志と共に英吉利法律学校即ち今の中央大学を創立し卒先躬ら育英の任に膺り遂に今日の盛況を致さしめ後官を辞し弁護士となる博士は推されて東京弁護士会会長たること前後二回に及び業務の余暇は述作に従事し其著はす所刑法原論、現行民法汎論を初めとして二十余種の多きに達し尚ほ其間法学博士の学位を授けらる博士は既に官を去りて弁護士たりし後も政府は其学識を重し或は法典調査会委員と為し或は法律取調委員と為し或は臨時法制審議会委員と為し以て其蘊蓄を尽さしめ博士亦一意励精頗る献賛する所あり就中陪審制度の如きは実に博士の首倡に出て筆に舌に孳々として論述倦む所なく造次にも是に於てし顛沛にも是に於てし遂に克く其制度の確立を致し今や実施も目睫の間に在り亦以て博士の社会民人に忠なるを知るへし嗚呼博士の学問是

850 江木博士逝く

〔『法学新報』第35巻5（400）号 大正14年5月10日〕

○江木博士逝く 中央大学創立者の一人たる法学博士江木衷氏は去る二月二十日頃寒冒に罹り同二十三日より就褥佐「左カ」肺上部に肺炎を起し患部に疼痛を覚え体温も三十八度を上下し爾来一進一退ありたれとも発病以来食欲著しく減退し衰弱

の如く其功業亦是の如し実に弁護士中にありては鉄中の鏘々たるものにして重態の報天聴に達するや其功を嘉みし特に勲二等に叙せられ瑞宝章を授けらる告別式は同十二日午後一時より牛込の博士邸に於て行はれ当日は雨中にも拘らず参拝者陸續として引きも断らざる有様にして告別式場に於て岡野中央大学学長帝国弁護士会創立委員長花井博士及第一弁護士会長原博士の靈前に供へられたる弔辞左の如し

嗚呼我カ畏敬スル法学博士江木衷先生終ニ逝ク寔ニ痛恨哀悼ノ至ニ堪ヘス先生ハ本邦法界ノ先覚、儒林ノ耆宿、夙ニ意ヲ文運ノ振興ニ用ヰ我カ中央大学ノ前身タル英吉利法律学校ノ創設ニ参画シ爾來其蘊蓄ヲ傾ケテ之ヲ諸生ニ授ケ彬々成学ノ士ヲ養ヒ之ヲシテ各々其ノ所長ヲ以テ世務ノ啓発ニ裨補セシム中年官界ヲ退キ状師ノ任ニ就キ冤枉ヲ伸ヘ人權ヲ護リ其ノ問法典調査法律取調等ノ委員ニ列シ深邃ノ學術、周密ノ思慮、以テ審議立案ノ事ニ膺ル凡ソ帝国ノ法制略々整理ヲ告ケ訟務亦頗ル面目ヲ更メタルモノ先生規画ノ力実ニ多キニ居ル就中其ノ半生ノ殊力ヲ濺キタル陪審ノ制度今ヤ既ニ確立ヲ告ケ之ヲ実施スルノ時期亦將ニ遠キニアラサラムトス惟フニ本邦司法ノ釐革、斯学ノ皇張先生ノ力ニ俟ツモノ尚甚タ尠カラス曩者先生ノ病ニ臥スルヤ吾人ハ切ニ其ノ回春ノ速ナラムコトヲ祈リ私ニ今後ノ指導ヲ期待シタリト雖不幸ニシテ天之二年ヲ假サス俄ニ此ノ大器ヲ奪ヒ後進ヲシテ茫乎トシテ津梁ニ迷ハシム痛嘆曷ソ夫レ勝フヘケムヤ茲ニ先生ノ英靈ニ告別スルニ方リ謹ミテ先生生前

ノ光烈ヲ揚ケ恭シク哀悼ノ微忱ヲ敷ク

大正十四年四月十二日 中央大学学長 岡野敬次郎

維大正十四年四月十二日、帝国弁護士会創立委員長法学博士花井卓藏、謹ミテ文ヲ以テ弁護士法学博士江木先生ノ靈ニ告ク。嗚呼、先生卒ニ此ニ至ルカ。古ヨリ誰レカ此ニ至ラサル者アラン。然レトモ吾人烏ソ克ク哭シテ慟セサルヲ得ンヤ。先生学東西ヲ窮メ、識天人ニ達シ、情君国ニ切ニ、志経世ニ存シ、国家社会ヲ裨益セシモノ勝テ数フヘカラス。初メ法学ヲ東京大学ニ修メ、造詣頗ル深ク、其業ヲ卒フル、直ニ擢ラレテ、大学講師ト為ル。尋テ諸官衙ニ歴任シ、至ル所令聞アリ。資性剛毅、身ハ仕籍ニ在リト雖モ、譽謬自ラ持シ、肯テ苟クモ当路ニ迎合セス。当時政府民法商法ヲ頒布シ、施行已ニ期アリ。先生深ク国情民俗ニ適セサルモノアルヲ憂ヒ、慨然蹶起、民間ノ志士ト共ニ、百方画策遂ニ其施行ヲ阻止シ、之レカ修正ノ端ヲ啓キ、以テ現行法典ノ頒施ヲ見ルニ至ル。以テ先生ノ風概ヲ見ルヘシ。先生固ヨリ官拘ヲ受クルヲ屑シトセス。職ニ在ル未タ十年ナラサルニ、遂ニ組ヲ解キ弁護士ニ従事ス。先生ノ事ニ臨ム、精誠端厚、剛ヲ吐カス、柔ヲ茹ハス、富貴ニ阿ラス、貧賤ヲ侮ラス、是ヲ以テ凡ソ天下ノ大訟疑獄、殆ト援ヲ先生ニ請ハサルモノナク、斯界ノ名声ヲ擅ニスルモノ実ニ三十有余年。ニタヒ推サレテ弁護士会长ト為ル。以テ先生ノ信望ヲ想フヘシ。先生ノ弁護士ト為ルヤ、専ラ意ヲ法治ノ大局ニ注キ、裁判ノ宿弊ヲ除キ、制度ノ改善ヲ図リ、以テ社会民

人ノ安寧幸福ヲ保持増進センニハ、吾人弁護士ノ一大団体ヲ組成スルニ如クハナシトシ、有志ト謀リ、日本弁護士協会ヲ設立シ、以テ正義公道ヲ振作トシ、民間法曹ノ勢望ヲ天下ニ發揚シ、当路ヲシテ反省釐革セシメタルモノ甚々多シ。然レトモ近時情勢一變、先生亦同志ト共ニ協会ト相絶ツノ止ムナキニ至リ、更ニ帝国弁護士会ノ創立ヲ図リ、百爾ノ設備、既ニ成リ、創立總會ノ日亦已ニ定ルニ至ル。先生ノ意ヲ世道人心ニ致ス篤シト云フヘシ。先生夙ニ法学ノ普及ニ志シ、壯歲同志ト共ニ英吉利法律学校ヲ創立シ、率先躬ヲ育英ノ任ニ膺リ、遂ニ中央大学現今ノ盛ヲ見ルニ至リシノミナラス、業余述作ニ従事シ、其著ハス所ニ十余種ノ多キニ及ヒ、論理精緻、筆鋒犀利皆能ク世ニ行ハル。刑法原論ノ如キハ其少作ニ属スト雖モ、旧来ノ陳套ヲ擺脫シ、帝国刑法学界ニ一新紀元ヲ開キタリト云フモ、誰カ敢テ之ヲ溢美ト云ハシ。晩年著ハス所ノ国家道德論ハ、言言時弊ニ切中シ、世人ヲシテ警醒感悟セシメタルモノ尠カラズ。先生既ニ官ヲ去リ、弁護士タリシト雖モ、当路其學識ヲ重シ、或ハ法典調査委員ト為シ、或ハ法律取調委員ト為シ、或ハ臨時法制審議委員ト為シ、以テ其蘊蓄ヲ尽サシム。先生モ亦一意励精、頗ル献替スル所アリ。功績尤モ著シ。就中陪審制度ノ如キハ、實ニ先生ノ首倡ニ出テ、筆ニ舌ニ孳々トシテ論述倦ム所ナク、造次ニモ是ニ於テシ、顛沛ニモ是ニ於テシ、遂ニ克ク其制度ノ確立ヲ致シ、今ヤ其實施日睫ノ間ニ在リ。亦以テ先生ノ社会民人ニ忠ナルヲ知ルヘシ。

嗚呼、先生ノ學問是ノ如ク、先生ノ功業亦是ノ如シ。弁護士アリテ以來未タ先生ノ如キモノ之レアラサルナリ。先生ノ病革マルヤ。

天子其功ヲ嘉ミシ、特ニ叙スルニ勲二等ヲ以テシ瑞宝章ヲ授ケタマフ。恩榮何物カ之レニ過キン。先生亦以テ瞑スヘシ。然レトモ先生ノ首倡ニ繋ル陪審制度ハ未タ實施ニ至ラス、先生ノ提議ニ繋ル帝国弁護士会ハ未タ存立ニ至ラス。而シテ其實施其存立皆俱ニ先生ニ待ツモノ極メテ多キニ、今其溘亡ニ遭ヒ、泰山頽レ、梁木壞ル。吾人器「哭カ」シテ慟セサラントスルモ豈ニ其レ得ヘケンヤ。然レトモ先生襟懷灑脫、平生客ヲ愛シ、詩酒相親ミ、其賦スル所率ネ独創ニ出テ、敢テ古人ノ步趨ヲ趁ハス。一唱三歎ノ妙アリ。其終リニ臨ムモ、猶ホ風度常ノ如ク、侍人ヲシテ臥榻ヲ庭卉ニ轉向セシメ、從容詞友ト韻事ヲ話シ、死生ヲ視ルコト、雲煙ノ眼ヲ過クルカ如シ。吾人器「哭カ」シテ慟スト雖モ亦聊カ自ラ慰スルニ足ルヘキモノアランカ。嗚呼情迫リ語次ナシ。英靈其レ茲ニ衷誠ヲ鑑ミタマヘ。

大正十四年四月十二日

帝国弁護士会創立委員長 法学博士 花井卓藏

第一東京弁護士会長法学博士原嘉道謹ミテ會員法学博士江木先生ノ靈ニ告ク。先生學問該博、才識備邁、弁護士ノ職ニ在ルコト三十余年。德望一世ニ輝キ、名聲中外ニ遍ネク、凡ソ大訟疑獄先生ニ籍リ屈ヲ信ヘ冤ヲ雪カサルモノ幾ント希ナリ。業余法ヲ学堂ニ講シ、以テ天下ノ英才ヲ育シ、書

ヲ芸窓ニ著ハシ、以テ時勢ノ進退ヲ助ケ、常ニ法令ノ審議
ノ任ニ膺リ、国利民福ニ貢献ス。陪審ノ新制ハ実ニ先生ノ
首倡ニ繋リ、遂ニ其確定ヲ見ル。平素同人ノ品位進修ニ力
メ、吾会ノ為メニ画策献替スル所頗ル多ク、吾会夙ニ先生
ニ倚テ以テ重キヲ為ス。而シテ今ヤ則チ亡シ。痛恨曷ソ勝
ヘン。然レトモ

天子厥功ヲ嘉ミシ、持「特カ」ニ先生ヲ勲二等ニ叙シ瑞宝章
ヲ授ケタマフ。洵ニ異数ニ属ス。先生以テ長ヘニ瞑スヘシ。
茲ニ文ヲ以テ恭ク弔意ヲ致ス。

大正十四年四月十二日

第一東京弁護士会長 法学博士 原嘉道